

# メディアセンターの取り組み ～学習相談員，S-Circle そしてライティング& リサーチコンサルタントとの連携～

やなせみちよ  
梁瀬三千代

(湘南藤沢メディアセンター主任)

## 1 はじめに

2013年3月18日に開催された、教養研究センター主催の「学びの連携」プロジェクト 第4回公開セミナー「塾生による塾生のための半学半教の場作り—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後—」をきっかけに、日吉、矢上、湘南藤沢で活躍している学習相談員、S-Circle、ライティング&リサーチコンサルタント（以下、WRCと称す）の輪が広がろうとしている。

本学での「ピアサポート」は、全学的な方針に基づく施策としてではなく、各キャンパスのニーズに応じた形で活動が進められてきている。昨今、全国的にも「ピアサポート」への関心は高まっており、本学の取り組みを全学的な視点からまとめてみようと考えたのが、本稿執筆の契機である。本稿では3地区の取り組み方を紹介する。また、特にライティングサポートに着目し、それぞれの活動報告を行うと同時に、日米大学におけるライティングセンターの実態を概観し、今後のあり方にも触れてみたい。

## 2 3地区ピアサポートの紹介

まず、3地区のピアサポートの概要について紹介する。

### (1) 学習相談アワー（日吉）

開設は2008年秋学期で、週1回、午後1時から6時の時間で実験的に開始、2009年度から本格運用している。教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」を履修した学部2～4年生12名と三田地区所属の大学院生2名（博士課程）、学外大学院生1名（修士課程）が担当している<sup>1)2)</sup>。3地区の中では最も早くから活動を開始し、今年で6年目を迎えている。

### (2) S-Circle（矢上）

理工学部のある矢上地区のS-Circleは、慶應義塾

創立150年記念未来先導基金2010年度採択プログラム「学生スタッフによる図書館における新しいコミュニケーションの場の創生」として、未来先導基金の助成を受けて開始した。全11学科から公募で集められた学生スタッフ最大22名で構成、学部4年生以上で、メインは大学院生（修士課程）である<sup>3)4)</sup>。今年で4年目になる。

### (3) ライティング&リサーチコンサルタント（WRC）（湘南藤沢）

2010年10月～2011年6月の準備期間、2011年7月～2012年3月の試行期間を経て、2012年4月より本格運用を開始した。3地区の中では一番後発で、今年2年目を迎えている<sup>5)</sup>。メンバー3名の他、5月にはヒューマンインターフェースを専門としている大学院生（博士課程1年）が新たに加わり、月曜、水～金曜の午後、大学院生（博士課程）2名、ポストドクター2名の4名で対応している。

## 3 3地区メディアセンターの取り組み方

次に、それぞれの運用体制について、メディアセンターの役割にも触れながら紹介する。

### (1) 学習相談アワー（日吉）

教養研究センターとメディアセンターとの共催事業となっている。相談の場所は日吉図書館1階レファレンスデスクにあり、午後5時まではレファレンススタッフが同じデスクの傍にいて、資料の調べ方などでわからない場合はサポートできる体制を作っている。学習相談員とのミーティングは毎年学期末に反省会を行っていたが、今年度は4月のキックオフミーティングが加わり、年3回開催となっている。参加者はその時参加できる学習相談員、教養研究センター職員1名と教員若干名、メディアセンターの課長1名とレファレンス担当2名である。打ち合わせの時間はキックオフミーティング1時間、



写真 1. 学生相談員（日吉）



写真 3. WRC（湘南藤沢）



写真 2. コンサルテーションスペース（矢上）

反省会 2 時間程度としている。また、教養研究センター教員と学習相談員との会合や学習相談員だけの打ち合わせ（三田で月 1 回程度）も行っている。

メディアセンターの主な役割は、①学習相談アワーの場としてレファレンスデスクを提供し、必要な資料・設備を整える、②学習相談員のスケジュール調整を行う、③学習相談アワーに先立って学習相談員の指導を行う、④学習相談員の相談業務をサポートする、⑤成果のとりまとめを行う、ことである。

一方、教養研究センターの主な役割は、①学習相談員の人選を行う、②学習相談アワーのねらいと効果を教員に広報し協力を仰ぐ、③教員の立場から学習相談員にアドバイスと提案を行う、④大学教育改善のために活動の成果を反映させていくための基盤整備をすること、である<sup>9)</sup>。

## (2) S-Circle（矢上）

2010 年から 3 年間続いた未来先導基金での活動を継続するため、2013 年からはメディアセンターの経常予算での活動に変わり、メディアセンターの通常業務としての位置づけを模索している。2010 年度

創想館改修の際に、学習環境を整備することを目的として設置された 1 階のコンサルテーションスペースで対応している。隣には学習エリアと呼ばれる広々としたスペースもある。活動の一つとして、展示やサイエンスカフェなどを開催し、メディアセンターは展示スペースや会場など場所の提供を行うと共に、運営面でのサポート体制をとっている。

メディアセンターの主な役割は、①スケジュールや予算の管理、②参考資料・補助資料の収集、③相談業務と企画業務のサポート、④成果のとりまとめ、⑤日吉キャンパスへの広報、⑥教員・学事担当・学生相談室との窓口、などである。

## (3) ライティング&リサーチコンサルタント (WRC) (湘南藤沢)

メディアセンターが主催している。2 階イベントスペースに机を配置しているが、各種講習会などのイベントがある場合は、机を移動させることもある。レファレンスデスクの傍にあるため、スタッフがいる時は資料の調べ方などのサポートができる。また、17:00~19:40 までは学部生（3,4 年生）と大学院生（修士課程）で構成された「データベースコンサルタント」のサービスデスクが近くにあるので、資料やデータベース検索については、専任スタッフがいなくてもサポートできる体制が整っている。WRC との打ち合わせは年 7~8 回。日程は学期初めと学期末以外は不定期で、参加者は WRC メンバーとレファレンス担当 2 名、打ち合わせの時間は 1 時間半~2 時間、各自ノート PC を持ち寄り行う。

メディアセンターの主な役割は、①スケジュール管理、②レファレンス業務におけるサポート体制、③質問票のリスト化と統計作成、④参考資料・補助資料の収集、⑤ポスター・電子掲示板原稿など広報

全般、⑥教員・学事担当との窓口、⑦企画の立ち上げ、などである。その他、『ウィークリー出版情報』による図書の選定を依頼している。

#### 4 3 地区ピアサポートの活動状況

それでは、具体的な活動実績について、やや詳細な数字も示しつつまとめてみたい。

##### (1) 学習相談アワー（日吉）

2013年度春学期は、5月7日（火）～7月19日（金）の間、月～木曜は13：00～18：00、金曜は13：00～16：30で運用している。学習相談員の構成は、学部生12名のうち2年2名、3年5名、4年5名、大学院生は3名（修士課程1名、博士課程2名）であるが、所属別に見ると、文学部5名、経済学部1名、法学部4名、商学部1名、理工学部1名、大学院は社会学研究科2名、学外大学院生1名から成る。前年の2012年度も学部生13名（2年4名、3年5名、4年4名）、大学院生3名がおり、所属は文学部3名、経済学部3名、法学部3名、商学部1名、理工学部1名と、各学部の学習相談員が揃うという良い状況が続いている。

相談件数は2009年度は82日で179件（複数人で相談に来た場合も1件として計上）、2010年度は103日で195件、2011年度は113日で325件、そして2012年度が126日で423件、と相談日も年々増え、相談の数も増加していることがわかる。2013年度春学期は54日で214件（2012年度春学期は53日で217件）とこれまで最多の前年とほぼ同じペースとなっている。

相談件数の内訳として、相談時間について3分未満と3分以上の統計をとっているが、3分未満ではパソコン関係、利用案内が多く、3分以上ではレポートの書き方全般（テーマ設定の方法、アウトラインの作り方など）が最も多く、参考文献・引用文献の書き方、資料の探し方と続いている。日吉地区には、文・医・薬学部1年と経済・法・商・理工学部の1・2年生が在籍しており、相談者も1・2年生がほとんどだが、三田地区（人文・社会科学の専門課程）の学部生が相談に来るケースも見受けられる。

相談受付の他には、学習相談員による企画展示を年2回開催している。この展示は彼らが経験したことを整理し、同じ悩みを共有しようという意図から生まれたもので、2010年度の「～慶應生のノートは

美しいのか～」を皮切りに、2011年度には「失敗から学ぶレポート作法」、「これからの「ノート」の話しよう：塾生のノート拝見」、2012年度には「どこがダメなの！？わたしのレポート～教えます、正しいレポート作成術とスケジューリング～」、「学習相談員、一歩抜け出す秘訣あるよってーノートの取り方、資料の探し方、問いの立て方のすべてー」、2013年度は「はじめよう！レポ活」、と続いている。

さらに、今年度は学習相談によるセミナーを5月27日（月）と31日（金）に開催し、2日間で60名以上の学部生たちが参加した。7月には9日（火）～11日（木）と16日（火）～18日（木）の4、5限に図書館内での相談窓口を増やす形で、出張デスクの開設も試みている。新たな相談者を獲得することと適当な相談場所を探ることも目的の一つとしている。

教養研究センター主催の授業科目「アカデミック・スキルズ」を履修し終えた学部生や大学院生たちが学習相談員になり、彼らが学んだ論文の書き方やマナー、問題解決の方法、プレゼンテーションの手法などを学生たちに教えていくというスタイルがとられている。矢上、湘南藤沢地区に比べ教員の関わりが大きく、学生、教員、メディアセンタースタッフとの連携がうまく融合している。

##### (2) S-Circle（矢上）

今年度春学期は、4月8日（月）～7月29日（月）、月～金曜の12：00～17：00で開設している。学生スタッフは前述したように、全11学科から公募で集められた19名で構成され、履修科目、研究室・学科選び、大学院入試、矢上での過ごし方などについての相談も受け付けている。レポートや論文の書き方だけではなく、日常の学生生活に関する相談も受け付けているところが特徴である。相談者は理工学部所属の学部生がほぼ大半を占めている。

相談件数は、2010年度は149日で190件（日吉同様、複数人で相談に来た場合も1件として計上）、2011年度は160日で316件、2012年度は159日で305件となっている。2013年度春学期は73日で120件（うち、7月25日に日吉地区で臨時開設した出張デスクでの相談件数9件を含む）となっている。年間受付件数は2011年度以降300件以上と安定している。2012年度の相談内容は勉学41%、雑談31%、進路9%、その他（一言案内）7%、研究室7%、生

活3%,履修2%,就職1%となっている。2013年度春学期については、雑誌というカテゴリをなくし内容によって振り分けているため、相談上位は、勉学、生活、履修の順となっている。

S-Circleのメンバーはリーダー、サブリーダーの他に、相談業務の改善検討やシフト作成を担当するSTG(Soudan Thinking Group)班、ポスター作成やWebサイト管理を担当する広報班、イベント展示の企画運営を担当する企画班と3つの班に分かれ、業務を遂行している。前年とメンバーの入れ替わりがあり、2013年度春学期はリーダー、サブリーダー、企画班でスタートし、よりよい形を模索しているところである。

どのような企画で展示を行っているかを見るために、これまで実施した展示のタイトルを列挙する。

2010年4回「『微積』は誰が造った?」、「講演「Gaming can make a better world」を調べてみた」、「矢上での生活」、「Brain Machine Interface」、2011年8回「新・矢上での生活」、「矢上周辺マップに行ってみた：ひょうら編」、「矢上周辺マップに行ってみた：箕輪町編」、「B3はこれを読んでけ!!!」、「矢上周辺マップに行ってみた：元住吉編」、「矢上でのスマートフォン活用術」、「矢上周辺マップに行ってみた：南加瀬編」、「10代の記憶」、2012年5回「健康について本気出して考えてみた」、「音楽で英語ブラッシュアップ!」、「矢上シネマパラダイス」、「矢上での生活」、「矢上Times」、といった感じである。4年間に亘って創想ライブラリーの選書とその新着展示の際のPOP作成も行っており、多彩な活動を続けている。

また、矢上キャンパスならではの企画として「サイエンスカフェ」がある。これは、毎回、科学的トピックを取り上げ、教員からのレクチャーを聴きながら、参加者も交えてのディスカッションを行うというものである(お茶とお菓子付き)。2010年6月の情報工学科の山崎信行准教授(現、教授)の回から2013年7月まで5回続いている。

この他にも様々なイベントを行っており、2010年8月のオープンキャンパスで高校生向けにメディアセンターの施設案内や文献検索デモンストレーション、2010年12月には参加者が本を持ち寄り交換する「Yagami Book Share」、2011年7月の矢上サッカーマッチ「Winning Yagami Eleven」、同12

月の学部3年生向け「就活に勝つ!」、と充実したラインナップになっている。2012年10月の留学生と仲良くなろう、ほかの国の文化を知ろうという意図で企画された「矢上サロン」では6カ国の留学生が参加して、交流を深めている<sup>7)</sup>。

### (3) ライティング&リサーチコンサルタント(WRC)(湘南藤沢)

今年度春学期は、4月10日(水)~7月25日(木)で実施した。5月下旬までは3人体制だったため水曜14:00~19:00、木曜14:00~16:30、金曜17:30~19:30であったが、4人体制になったところで月曜14:00~17:00が加わった。相談者は学部生から大学院生まで幅広く、2012年度は109日で146人(秋学期は研究会への出張が10月と11月の2回あり、それぞれの参加者12人、22人の合計34人も加算している)、そのうち大学院生が16%を占めており、リピーターが多く、中には5回以上という相談者もいる。2013年度春学期は49日で144人(「資料検索法」のWRC担当のコマへの出席者57人も加算)(2.93人/日)であったが、前年度の2012年春学期の54日で39人(0.72人/日)の4倍と大きく上回った。

相談内容は、2012年度は論文の構成41%、文章の書き方17%、情報の集め方17%、その他(研究方法、研究の進め方、先行研究分析など)11%、参考文献の書き方7%の順となっている。2013年度春学期は比率は違うものの同じような傾向であった。

彼らの活動は『KEIO SFC REVIEW』No.50に紹介され、研究会への出張、公開講座への参加など、と広がっている。また、活動報告を『MediaNet』no.19(2012)へ発表した。

湘南藤沢ではライティングについて学ぶ方法として、ライティング技法の科目の受講があるが、履修に当たっては人数制限があり、必ずしも希望する学生全員が受けられる訳ではない。また、1年生から研究会に所属することで先輩からライティングに関する教えを受けるという図式もあるが、その機会を得られない学生もいるだろう。そういった学生たちにとって、WRCはライティングに対処するうえでの拠り所となっているに違いない。

論文の書き方に留まらず、研究内容に踏み込まざるを得ないケースもあるため、教員との連携を重要視している。教員へのアンケートを何度か実施し、

活動報告を行うと同時に意見などを聞くようにして、WRCの運営に活かすようにしている。

今年度春学期は前述した情報リテラシー科目「資料検索法」での講義の他に、学生たちが企画する合同研究会説明会への参加（6月19日（水）当日は延べ人数500名以上が参加）、6月26日（水）にはWRC第1回トークセッション「SFCで楽しく研究活動をするためには？—SFC流研究手法の極意」を開催し、その模様をUstreamで配信する（参加者は学部生3名、大学院生1名、教員1名、アクセス数は78回）など新しい試みを実施した。秋学期に向けてはWebサイトの改訂を予定している。さらには、コンテンツを充実させるために、夏季休業期間中にWRC各自が専門領域での参考文献の書き方や脚注の使い方などを執筆し、掲載する予定でいる。湘南藤沢の学生団体が主催している「SFC CLIP」というニュースサイトへの記事登載や、研究会の学生が多く利用するエレベータ付近にポスターとスケジュール表を一緒に貼るなどして広報に力を入れる一方、WRCトークセッション第2弾を開催する予定でいる。

## 5 日米大学におけるライティングセンターの動き

近年各大学でピアサポートの動きが活発になってきている。これまで本学の取り組みでも紹介したように、ピアサポートと一口に言っても、その内容は大学やキャンパスの特性に応じて多彩である。その中で、SFCで浸透しつつあるライティングサポートに焦点を当て、ライティングセンターに関する国内の動きとアメリカのライティング教育の歴史、そして、大学におけるライティングセンターの動きを概観したいと思う。

### (1) 国内の動向

慶應義塾大学メディアセンターと協定校にある早稲田大学は2004年度に国際教養学部ライティングセンターを発足させ、翻訳や添削とは趣旨を異にして、書き手の能力向上を目指した指導を行っている。専任のスタッフを置き、大学院生で指導を行うチューターを配し、英語、日本語での対応ができる体制をとっている<sup>8)</sup>。

また、国際基督教大学では、1995年に作成された「図書館増築の要望書」の中に、ライティングセン

ター（仮称）の設置が提案されたが、論文指導にあたる教員および専門員の確保をすることが大きな問題となり見送られた。その後、ミルドレット・トップ・オスマー図書館開館10周年を迎えた2010年12月にパイロット版として、ライティングサポートデスクがスタートしている。教養学部長室と図書館との共同運営として、レファレンスサービス・センター近くの一角を利用して、教員からの推薦を受けた大学院生のチューターが対応している<sup>9)</sup>。

その他、和歌山大学経済学部では文章作成指導に対する実践的な提言をしたり<sup>10)</sup>、麗澤大学日本語教育センター・ライティングセンターのように留学生を対象に日本語教育における文章指導を行っているところがある<sup>11)</sup>。

現在は、早稲田大学のように独立したライティングセンターがあるところ、本学や立命館アジア太平洋大学など図書館の一部を開放しているところ<sup>12)</sup>、津田塾大学のように別棟で教室を使って対応しているところ<sup>13)</sup>とさまざまである。運用体制も図書館が関わっている場合とそうでない場合がある。担当者は専任の教員がいる場合といない場合、チューターは研修を受けた人たちもいれば、本学の日吉の学習相談のように「アカデミック・スキルズ」の履修修了者や湘南藤沢のWRCのように大学院生（博士課程）やポストドクターを採用する場合もあり、それぞれの大学や図書館の事情に応じて異なっている。

国内大学のピアサポートの活動動向については、日吉の学習相談員である間篠剛留君が本学教養研究センターの報告書の中で「学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特徴」に詳しく書いているので、そちらを参照していただきたい<sup>14)</sup>。

### (2) アメリカの動向

公立教育におけるライティングの指導については、初等学校の段階からスタートする。もともと教会での説教を読み書きすることから始まっているが、その歴史は古く、マサチューセッツ州では1790年時の公立学校には初等学校としての3つのリーディング・スクールと3つのライティング・スクール、中等学校としての1つのラテン・グラマー・スクールがあった。その後、初等学校の下に下級初等学校としてプライマリー・スクールなどが開校、リーディング・スクールやライティング・スクール

はグラマー・スクールと呼ばれるようになり、プリマリー・スクールの上に立つ上級初等学校へと変遷をたどることになる<sup>15)</sup>。

今年度からレファレンススタッフと一緒に担当している「資料検索法」の中で、WRCメンバーの直江健介君にライティングについて講義を依頼した際、彼が行った事前アンケートで、高校までにライティングについて学んだことがあるかどうか聞いたところ、海外の小学校で学んだ学生が57名中1名いた。マサチューセッツ州の州教育庁のWebサイトを見ると、Boston Public SchoolのLearning StandardsにはKindergartenからHigh Schoolまでの学習基準が公開されており、ライティング技法については、第4学年以降、調査質問の設定やデータ収集や分析(正しいかどうかの判断などと裏づけ)、事実と意見を区別すること、索引やキーワードの設定、印刷物と非印刷物の利用、第7学年ではMLAやAPAなどの記述を使用することについて述べられている<sup>16)</sup>。

一方、大学のライティングセンターについては1920年代後半から1930年代前半にかけてライティングラボラトリー(初期のライティングセンター)が設置され、1年生の英語(母国語)教育でライティング技法を教えるようになる。そして、1950年代初頭までには高等教育機関の中で組織づけられた<sup>17)</sup>。1960年代以降大学のユニバーサル化が進み、基礎学力不足の学生が大学へ進学するという事態が生じ、この対処のために英語(母国語)教育の一環としてライティングセンターがその役割を担うことになる。1980年代からは様々な国からの留学生が大学で学ぶことになり、1990年代以降は外国語としての英語のライティング指導が追加される<sup>18)</sup>。

ウェブ上で検索した範囲ではあるが、図書館とは別の建物にライティングセンターを置いている大学(北イリノイ大学<sup>19)</sup>、ワシントン大学<sup>20)</sup>等)も見られるものの、ジョージタウン大学<sup>21)</sup>やサフォーク大学<sup>22)</sup>、ウェインズバーグ大学<sup>23)</sup>やテキサス州のトリニティ大学<sup>24)</sup>など図書館の中にライティングセンターを設置しているところも多い。また、図書館内に設置している場合でも、モンタナ大学のLibrary Commons<sup>25)</sup>、ヴァージニア工科大学のLearning Commons<sup>26)</sup>のようにいわゆるラーニング・コモンズの中の機能と位置づけられている例も少なくない。ち

なみに、“ライティング&リサーチセンター”で検索するとオハイオ大学<sup>27)</sup>などがヒットする。

中でもアメリカのアイビーリーグの一つであるダートマス大学のInstitute for Writing and Rhetoricは“writing-speaking-research-teaching communication at its best”とWebサイト上に打ち出しており、かなり充実した取り組みを行っている。ここも場所は図書館の中にある<sup>28)</sup>。

日本同様、アメリカにおいても大学によって設置場所や位置づけなどが異なっているのが窺える。

## 6 ピアサポートの今後のあり方

平成25年6月14日付閣議会議で決定した第2期教育振興基本計画では、基本政策8「学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転換」の中で、「ティーチング・アシスタントなどの教育サポートスタッフの充実、学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化」があげられている<sup>29)</sup>。

このような状況の中で、日吉、矢上、湘南藤沢の3地区が独自のピアサポート活動を開始していることは意義深いことであると思う。冒頭で触れた2013年3月の「学びの連携」プロジェクト第4回公開セミナーでは、3地区の相談員が同じような課題を抱えていることが判明した。共通の課題は、広報活動の強化と情報の共有化である。

広報活動の強化の目的は、学習相談員、S-Circle、WRCの活動を学部生・大学院生へ周知するだけでなく、教員や他部署の職員にも周知することであり、そのためには、

- ・各地区Webサイトの目立つところで紹介する
- ・SNSなどを使って常に情報を発信する
- ・授業などで推薦していただけるよう教員会議で活動報告をすると同時に学生たちに相談に行くよう推奨してもらうよう依頼する
- ・学生団体(例：SFC CLIP)と連携をはかる
- ・学生部など他部署との懇談の場を持つ

などが考えられる。その他、口コミの効果も見逃せない。日吉と矢上では展示も活発に行っているので、3地区合同展示や展示の巡回なども試みてはどうか。

情報の共有化については、後任者への引き継ぎも考慮して、

- ・メーリングリストを活用する

・S-Circle や WRC で実践している Wiki などを使ってのマニュアル作りを進めていく  
 ・それらには、レファレンススタッフも参加し、誰もが書き込みができるようにしていく  
 などがある。WRC が実践しているノートへの記録も情報共有の一つのツールとして活用できるし、3地区合同のミーティングを年度末に開いて情報交換などを行うことも有効であろう。

軌道に乗りつつあるピアサポートであるが、それぞれに課題はある。日吉の課題として学生相談員の質の維持と向上があげられる。これについては、先陣を切ってスタートした日吉の学習相談員と教養研究センター教員との連携がうまくいっているのを活かして、質の維持・向上のためのモデルケース作りにつなげられると良いと思う。その成果に、S-Circle や WRC で対応した事例などをプラスして問答集などを作ることも可能かもしれない。

矢上の S-Circle は、2013 年度は未来先導基金の助成額と同額の予算を確保することができなかったため、活動を縮小せざるを得なかった。今後、外部資金を含め活動資金をどう確保するか、また経常化、規模縮小することにより学生やメディアセンタースタッフのモラル（士気）をどう高めていくかも課題である。

湘南藤沢では WRC の後継者探しが大きな問題となっている。一定のレベルに達したコンサルタントが必要であり、そのためには、現在の博士課程レベルを維持するか、修士課程レベルまでとするか、悩むところである。採用時に、レファレンススタッフが面談した後、WRC からの要望もあり、彼らがコンサルタント希望者と対談する機会を設けた点は、その希望者のレベルの判断に功を奏している。

メディアセンターとしては運用体制に目を配り、彼らの意欲がなくならないような環境作りやケアを心がけていくことが大切であると思う。そのためには、現時点では問題視されていないが、彼らの働きに見合う賃金の確保も今後の課題ではないだろうか。

また近年、アメリカのフロリダガルフコースト大学や大阪大学のように、図書館員が直接ライティング指導にあたるケースが出てきている<sup>30)31)</sup>。ライティングサポート機能においてどのように図書館や図書館員が関わっていくのか、新たな課題も生じている。

今回紹介した学習相談員、S-Circle、WRC の活動は慶應義塾の伝統である“半学半教”の一つのやり方として成功していると思う。彼らの活動を今後益々拡充するためにも、学生部など他部署との連携や、キャンパスを越えた協力体制を築くことが大切ではないだろうか。

最後に本稿を執筆するにあたり、日吉の杉真梨子さん、矢上の藤本優子さんにご協力いただいた。この場を借りて、お礼申し上げたい。

#### 参考文献

- 1) 慶應義塾大学教養研究センター. 塾生による塾生のための半学半教の場作り—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後. 慶應義塾大学教養研究センター編. 横浜, 慶應義塾大学教養研究センター, 2013, p. 53.
- 2) “レポート・学習相談”. 日吉メディアセンター. <http://www.hc.lib.keio.ac.jp/studyskills/consultation.html>, (参照 2013-06-29).
- 3) 前掲. 慶應義塾大学教養研究センター. 塾生による塾生のための半学半教の場作り—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後.
- 4) 向當麻衣子. 理工学メディアセンター S-Circle 活動報告—塾生による塾生のための相談窓口—. MediaNet. 2010.11, no. 17, p. 72-73.
- 5) 天笠邦一, 直江健介, 笠井賢紀. ライティング&リサーチコンサルタントの実践と現在. MediaNet. 2012.12, no. 19, p. 44-47.
- 6) 間篠剛留. “学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特徴”. 塾生による塾生のための半学半教の場作り—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後. 慶應義塾大学教養研究センター編. 横浜, 慶應義塾大学教養研究センター, 2013, p. 37-52.
- 7) “S-CIRCLE”. Riko-Gaku Media Center. <http://keio-circle.jp/activity.shtml>, (参照 2013-07-18).
- 8) 佐渡島紗織. “大学における「書くこと」の支援—早稲田大学国際教養学部における「ライティングセンターの発足—”. 全国大学国語教育学会発表要旨集. 2005, p. 193-196.
- 9) 畠山珠美. ライティングセンター：構想から実現へ. 情

- 報の科学と技術. 2011, vol. 61, no. 12, p. 483-488.
- 10) 藤木剛康. 日本の作文教育の問題点とライティングセンター和歌山大学経済学部の記事作成指導はいかにあるべきかー. 和歌山大学経済学会研究年報. 2011, vol. 15, p. 109-118.
  - 11) 實平雅夫. 日本語日本文化教育におけるライティングセンターに関する一考察. 神戸大学留学センター紀要. 2012, vol. 18, p. 37-50.
  - 12) “ライティングセンター”. 立命館アジア太平洋大学. [http://www.apu.ac.jp/home/study/index.php?content\\_id=18](http://www.apu.ac.jp/home/study/index.php?content_id=18), (参照 2013-06-25).
  - 13) “津田塾大学ライティングセンター”. 津田塾大学ライティングセンター. <http://twc.tsuda.ac.jp/>, (参照 2013-06-25).
  - 14) 前掲. 間篠剛留. “学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特徴”. p. 37-52.
  - 15) 南新秀一. アメリカ公教育の成立：19世紀マサチューセッツにおける思想と制度. 東京, ミネルヴァ書房, 1999, p. 199.
  - 16) “Learning Standards”. Boston Public School. <http://www.bostonpublicschools.org/learning-standards>, (accessed 2013-07-13).
  - 17) Lerner, Neal. “Time warp : Historical representations of writing center directors”. The Writing center director’s resource book. Murphy, Christina ; Stay, Byron L.eds. London, Routledge, 2010, p. 3-11.
  - 18) 前掲. 實平雅夫. 日本語日本文化教育におけるライティングセンターに関する一考察. p. 37.
  - 19) “Hours, Location and Contact”. Board of Trustees of Northern Illinois University. <http://uwc.niu.edu/uwc/hours/index.shtml>, (accessed 2013-07-13).
  - 20) “Directions to the Psychology Writing Center”. Department of Psychology, Washington University. <http://web.psych.washington.edu/psych.php#p=19>, (accessed 2013-07-25).
  - 21) “Georgetown University Writing Center”. Georgetown University Writing Center. <http://writingcenter.georgetown.edu/>, (accessed 2013-07-14).
  - 22) “Suffolk University Writing Center”. Suffolk University. <http://www.suffolk.edu/campuslife/2973.php>, (accessed 2013-07-25).
  - 23) “Waynesburg University Writing Center”. Waynesburg University, The Writing Center. <http://www.waynesburg.edu/undergraduate/academic-resources/academic-support/writing-center>, (accessed 2013-07-14).
  - 24) “University Writing Center”. Trinity University. <http://web.trinity.edu/x5287.xml>, (accessed 2013-07-14).
  - 25) “The Writing Center at the Library”. Montana State University, Library. <http://www.lib.montana.edu/help/writingcenter.php>, (accessed 2013-07-14).
  - 26) “Learning Commons/Writing Center”. Virginia Polytechnic Institute and State University. <http://www.lib.vt.edu/about/writing/>, (accessed 2013-07-14).
  - 27) “Graduate Writing & Research Center”. The Graduate Writing & Research Center, Ohio University. <http://ougradwritingcenter.wordpress.com/>, (accessed 2013-07-13).
  - 28) “Hours and Location”. Institute for Writing and Rhetoric, Dartmouth College. <http://dartmouth.edu/writing-speech/learning/support-writing-research-and-composing-technology/students/hours-and-location>, (accessed 2013-07-14).
  - 29) “教育振興基本計画”. 文部科学省. 平成 25 年 6 月 14 日閣議決定. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf), (参照 2013-07-23).
  - 30) Cooke, Rachel ; Bledsoe, Carol. Writing centers and libraries : One-stop shopping for better term papers. The Reference Librarian. 2009, vol. 49, no. 2, p. 119-127.
  - 31) 堀一成. “大阪大学における学習支援とインフラとしての自主学習空間”. 丸善学術ソリューションセミナー配布資料. 2013.07.19.